～テモテ・ブローマンさん～
皆さんから寄せられた追悼文

テモテさんの兄　ジャン・ブローマンさんより

私は良き戦いを戦い抜きました。私は走るべき道のりを走り終えました。私は信仰を守り通しました。　　テモテ第二の手紙 4:7（NKJV 訳）

私の体が形作られる以前に、あなたは私に目を留め、私のために作られた日々が、その 1 日もまだないうちに、あなたは全てをあなたの書に書き記されました。　　詩篇 139:16（NKJV 訳）

この世界が創造される前から、神様がテモシィーのために計画していたすべての任務（仕事）を彼はやり遂げ、その生涯を全うしたと私は信じます。今、テモシィーは天国の住まいに迎えられ、神様の「完全」な癒しをいただいていることでしょう。

テモシィーは自分の治療に携わってくれた医師や看護師たちにいつも積極的に福音を伝えました。いっしょに入院していた他の患者さん、外来で出会った患者さん達にも、いつも福音を伝えました。

ある日の彼との会話を思い出します。彼はこう言いました。「もし、この方々の中から一人でも救われる人がいれば、自分は病気した甲斐があった。」救われる人は決して一人ではないでしょう。

テモシィーは私たちに良い模範を残してくれました。私たちはそれを忘れることなく、イエスさまに喜ばれる日々を送りたいと思わされます。

私が通訳等でチア・コンベンションや白馬に行くと、彼の周りにはいつもチアの誰かが座って、話していました。私は、とてもうらやましく思いました。ティモシーが、チアの皆様を愛し続け、励まし続けていたからだと思います。

皆様が今日、愛する兄弟テモシィーの地上での歩みを覚え、こうして私たちと共に時を過ごしてくださったことに心から感謝します。

テモシィーは今、そして永遠に、イエスさまと共にいます。ハレルヤ！

猪苗代湖キャンプにてジャンさんと（2016 年 8 月）

テモテさんの召天式
（タイ　2022 年 9 月）

チアを当初からサポートし、タイの宣教に向かったサムエルさん（弟）らが、テモテさんらのタイでの5ケ月を支えた

慰めを受けるドルカスさん（左）

チア・メンバー 鍵谷陽子さんより

テモテ・ブローマンさんの思い出

私たち家族がテモテさんにお会いしたのは、20年近く前、チアで奉仕されていた時だったと思います。

幼い長男を連れて参加したコンベンションで、丸森の兄弟姉妹方の献身的なお働きと、主へのまっすぐな思いに触れ、感動しました。

その後、私たちがまだ横浜に住んでいた頃、窓の外からジャン・ブローマンさん（テモテさんのお兄さん）の声で、聖書の御言葉と勧めが流れてきました。きっとチアで会った人達だ！と思い、主人に「お願い！ うちに来て頂いて！」と頼みました。

主人と長男が伝道用の車を追いかけてくれ、その日、横浜を回っておられた四人の兄弟が来られ、夕食を共にして下さいました。

テモテさんたちはその日、伝道中の車に生卵を投げつけられたり、怒鳴られたりと、散々だったそうで、思わず「この街は…」と呟きそうになっていたところ、クリスチャン家族と出会えたので、「やっぱり神様は見ておられるなあ」と笑っておられました。

私たちも、兄弟たちからお聴きする、伝道や救われた人々との交わりについてのお証に、心が燃やされました。

そこから親しくさせて頂くようになり、猪苗代湖のキャンプに参加させて頂いたり、後には、仕事でのつながりから宮城に引っ越す事までになりました。

テモテさんはとてもフレンドリーで、分け隔てなく接して下さる方で、よく私たち一家を食事や交わりに招いて下さいました。

伝道や交わりを御一緒させて頂くだけでなく、互いに行き来する中で、私は、御夫妻の赤ちゃんや幼い子たちの相手をさせてもらったり、子どもたち同士も仲良くなり、息子がブローマン家に遊びに行った時には、一つのベッドに兄弟のように三人で寝かせてもらいました。

逆に、我が家にお子さんたちが来られた時には、部屋が狭かったので庭にテントを張り、子どもたちに一緒にお泊まりしてもらったり、毎年春には、相馬海岸での家族キャンプに御一緒させてもらったり…家族ぐるみでの、かけがえのない思い出が沢山あります。

その後、テモテさんは多発性骨髄腫を発症されたのですが、2 週間という余命宣告をされた後、主が触れてくださり、奇跡の回復をされた時には、神様の御業に圧倒され、御名をほめ讃えるばかりでした。

振り返ってみても、この癒しは、テモテさんと御家族、教会の為だけでなく、私たち、交わりを持つすべての人の為の御計画でもあったと思えてなりません。

体調が少しでも良くなるたび、チアにも参加され、出会う一人一人に語りかけ、伝道や海外出張にまで出られる程、勤勉な方でした。一方、症状が悪化し、病床に伏せる時でも、遠方のクリスチャンに御言葉を送って励ましたり、病院で知り合った方々に伝道するなど、どんな小さなチャンスも逃さず、愛をもって主と人々に仕えておられ…その姿に、どれだけ励まされたかわかりません。

残念ながら、私たちは、仕事の都合で関東に戻らなければなりませんでしたが、LINE などで、お交わりを続ける事ができたのは、主の憐れみでした。

兄弟たちや御家族との交わりで教えられた事や、苦しみの中で励まされた御言葉（詩篇が多かったと思います）、病院での証の様子など、よく送って下さいました。

私は、返信が遅い上、恵みに圧倒されるたび長文になることも度々で、それをまた、うっかり夜中に送ってしまったり（そんな時でも、共感し、温かいお返事を未明に頂いたり）…と、申し訳ない事も多々ありました。それでも、お身体のきつい中、途切れる事なく、温かいやり取りを続けてくださいました。

体の弱さを抱え、子供の頃から死と隣り合わせで生きてきた経験のある私にとって、天国は、ぼ

成田空港にて　(2022 年 3 月)

んやりとした夢ではなく、渇望の的でした。苦難の中にあって、主の御約束や、慈しみ深さを分かち合えるテモテさんとの交わりは、慰めに満ちた神様からの贈り物でした。

テモテさんは、深く、家族を愛された方でした。御国の希望を分かち合う中で、時に「正直、僕は、まだ子どもたちと一緒にいたいなあ」と素直な気持ちを口にされる事がありました。

御自宅に寄せて頂いていた頃、お子さんたちを順に膝に乗せ、嬉しそうに話をしておられたテモテさんの姿が、思い出されました。

御家族に寄り添い、もっと愛し、訓練し、イエス様の恵みを分かち合いたいという強い想いと、全てを委ね、手放す痛みの大きさに、イエス様のお優しさや、パウロの苦悩を思わされました。

ですから、今年、日本での治療を手放し、御家族でのミッション、また教育を考え、タイに行く事を聞かされた時は、御夫婦が本当に大きな決断をされ、また、何年もかけて主がこの計画を導いてきて下さったのだと、胸がいっぱいになりました。

成田で見送った時は、全身の辛さに加え、腕も骨折され、相当の痛みに耐えておられたと思います。けれども、再会を喜んで下さり、主への感謝と信頼を分かち合う事ができました。

また、お子さんたちの表情や、兄の痛んだ身体を労わり支えておられる様子に、主の恵みによって紡がれた御家族の暖かい絆…ホームスクーリングの実を見せて頂きました。

お会いして、手を取り合うのは、これが最後となりましたが、タイに行かれてからも、御本人や奥様のドルカス姉が、写真や動画で様子を知らせて下さいました。

聖書の授業を担当されるテモテさんを取り囲み、子どもたちが御言葉に耳を傾けたり、賛美している様子を見る度に、ああ、タイに行かれて、本当に良かったと、何度も主に感謝しました。

最後の最後まで、主に信頼し、従いきられた兄でした。

私たちが知るのは、兄のほんの一面だけですが、受けた影響は一生涯に渡る事と思います。「生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。」(ローマ 14：8)。永遠に生きる人の生き様を見せて頂いたと思っています。

テモテさんはもう、すべての痛みから解放され、愛する主の懐に抱かれ、安らいでおられる事でしょう。

次にお会いできるその時には、何の妨げもなく、この世で分かち合った以上の喜びをもって再会できる、それが何よりの楽しみです。

「だれが、私たちをキリストの愛から引き離すのですか。苦難ですか、苦悩ですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。

……しかし、これらすべてにおいても、私たちを愛してくださった方によって、私たちは圧倒的な勝利者です。私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いたちも、支配者たちも、今あるものも、後に来るものも、力あるものも、高いところにあるものも、深いところにあるものも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」(ローマ 8：35 ～ 39)